

# ニュースアイ

東日本大震災の被災地にある大学で、震災関連の新しい研究所が次々に設立されている。東北大学(仙台市)の「災害科学国際研究所」、福島大学(福島市)の「災害復興研究所」では、中越地震(2004年)、中越沖地震(07年)を学んだ専門家が、その経験を生かしながら活動している。(報道部・高橋渉)

## 被災地の大学に震災研究所

「どのくらいの情報が集まりました。」津波の爪痕が残る宮城県七ヶ浜町の漁港。東北大の佐藤翔輔助教(20)が情報学Ⅱが、被災の記録を集める現地調査員「みちのく・いまをつたえ隊」のメンバーに声を掛けた。

同大は4月、災害科学国際研究所を開設。以前からあった災害制御研究センターを発展させた。約60人の研究者が在籍。地震や津波のメカニズムのほか、医学や経済学、心理学など多彩な分野を研究し、次の巨大災害に備える。

佐藤助教はそのメンバーの一人。新潟市出身で、長岡高専専攻科で学んでいた時に中越地震に遭った。高専では阪神大震災の避難者数とインフラ被害の関連性などを研究。中越地震では被災者になった。住んでいたアパートは避難勧告地域となり、車中泊も体験した。

京都大学のメンバーと、小千谷市で建物被害

# 「中越」経験者が活躍



の認定や権限証明の発行 考え研究してきたことが業務を手伝った。机上で 現場で通用せず、被災地に

### 記録収集

東北大・佐藤助教(新潟市出身)

## 住民組織し聞き取り

に直接入ることの重要性を知った。

東日本大震災の発生翌月に赴任した東北大では、被災記録を残すデジタルアーカイブの作業を担当している。記録を残す必要性は中越地震で感じたが、「当時はその余裕がなく十分にできな

旬のニュースや地域の課題、身近な出来事を記者の視点で掘り下げる「NEWS EYE」のコーナーへ、情報やご意見をお寄せください。〒950-1189 新潟日報社報道部「企画報道班」まで。ファックスは025(0750) 6540。メールはeye@nigata-nippo.co.jp。Dtp。

なかつた」と打ち明け「今読むべき大切な記事」を抽出し、支援者や被災者に知らせる取り組みを行っている。

中越、中越沖地震のケースも解析し、東日本大震災との比較を行う。中越、中越沖のヤフー・ニュースの情報量は地震直後から1週間で半減。東日本は2カ月で半減した。東日本の総情報量は、地震直後が中越・中越沖の約10倍、1年後は約50倍だという。福島県では「マクレル」「賠償」といった中越ではなかったキーワードが多く、岩手・宮城県では「水揚げ」「移転」などが重要な言葉になっている。

中越ではできなかった被災地の記録収集。東日本大震災の被災地では、宮城県の沿岸部15市区町で住民を「つたえ隊」として雇用し、被災者への聞き取り調査や、復旧・復興へと向かう被災地の写真撮影をしてもらっている。

記録の収集以外に研究しているのがウェブ情報の解析だ。インターネットのヤフー・ニュースに載った震災関連の言葉のデータをコンピューターで分析し、キーワードを見つけ出すシステムを開発。膨大な情報の中から震災の記録を残すため、現地調査員に被災地の状況を聞く東北大の佐藤翔輔助教(右)は宮城県七ヶ浜町

「中越や中越沖でできなかったことを東日本にぶつきたい」と佐藤助教。次の災害への備えとして、これまで学んだ教訓を伝えたいと考えている。

取材メモ